

我が団のアンチラちゃん
ん（病み属性ver.）

出海レン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「おい、あの十二神将のガキ。いい加減なんとかしろ、団長」

カリオストロ曰く、アンチラの狂愛《ヤンデレ》がヤバイらしい。このままいくと子作りさせられるとか。

なんだそりやと疑いつつ、言われるがままジータに扮装したグランが見たものはー。

この物語は、ヤンデレなアンチラちゃんを正気にさせようとジータ（グラン）が奔走するお話です。R17、9な描写マシマシ予定なので、苦手な方はご容赦ください。

ヤンデレ化キャラ

・アンチラ・ヴァジラ

淫乱化キャラ

・アニラ

目次

アンチラ（病み属性ver.）	1
犬猿の仲	14
淫靡な羊は困り顔が好物	29
ヤンデレ被害者の会 その1	45

アンチラ（病み属性ver.）

「おい、あの十二神将のガキ。いい加減なんとかしろ、団長」

「？」

「ほら、アンチラのことだよ」

……どういふことだろうか。

カリオストロが突然呼び出すから一体どんな実験に付き合わされるのかと身構えていたのに、アンチラを持ち出すとは。

旅の途中に立ち寄った神社で出会った少女、アンチラ。

恵方を司るといふ彼女との関係は意外なことによく続いていた。アンチラ曰く「一緒にテンジクに行きたいだけ」だそうだが、俺に仙術の手ほどきをしてくれたり、ルリアたちと一緒に遊んだり、今やすっかり騎空団の一員として馴染んでいる。

そんな彼女を厄介者扱いするなんて、もしかしなくても嫉妬か？ 大人げないなあ。

「ちげーよ、アホか。……お前、マジであいつの好意に気づいてないのか？ 狂ってんぞ」

「失礼な、団長に向かって狂ってるとは」

「お前じゃねえ。アンチラがだよ」

ますます意味が分からない。

首を傾げていると、カリオストロは目の前で思いつきため息を吐いた。ホント失礼なやつである。

「お前の部屋への侵入、私物の収集、[×][×]は基本。一日中お前に尽くして、お前のことを全て知らないきや気が済まない。おまけに依存と妄想まで発症済みだ。前に話した時にや、目にハート浮かべてお前のこと“お婿さん”って呼んでたぜ？ さすがのオレ様でもぞわって来たわ」

うむう、そう言われると確かに少し懐きすぎかもしれないな。

でもそれって、子どもによくある「私、大きくなったらお兄ちゃんと結婚する！」みたいな可愛いノリじゃないのか？

「ああ？ ……ちつ、こんだけ言っても分かんねえのかコイツは。睡眠薬やらヤバイ薬やら頼まれる身になってみるよこのアホが。毎回理由つけて断るの大変なんだぞ」

「ん？ 今なんて？」

「なんも言つてねえよ。ーつたく、話にならねえ。とにかくこのまま放置されるとこつちまで危険が及ぶんだ。あと、鈍チンなお前が一線を超えさせられる。いいから黙って、お前の分身貸せ」

「危険？　一線超え……？　よく分かんないけど、分身を貸すくらいならお安い御用だぞ。何に使うんだ？」

「すぐわかるだろうよ。本体は自分の部屋で昼寝でもしてろ」

「はいはい」



「なんで女の子の体にしちゃうかなあ……」

確かにこれなら万が一にもアンチラに身バレすることはないだろうが、なにもここままでしなくても良い気はする。まあ、薬を渡すカリオストロの顔がシリアスモードだったから素直に飲んだけどさ。

カリオストロの趣味だろうが、彼女に貸した分身の身体は完全な女の子になっていた。彼女曰く「グランの姿で接して分からないなら、他のやつに扮装して話してみろ。あいつの闇加減がお前でもよく分かるぞ」とのこと。

金色の短い髪に、整った顔。

名前はジータ。俺の姉で、刀の道を極めるために一人旅をしていた。今だに手紙を交

わすくらしいの親交はあるが、グランはそんな放浪癖のある身内がいるのを知られるのが恥ずかしくて、団の皆には黙っている……という設定らしい。なぜ設定まで？

服装は【剣豪】の服だが若干スースーするのが困りものだ。ステータスはそのままだしいけど、武器も昔使っていたのを引っ張り出しただけだし、本気で動いて大丈夫かこれ。

「ま、この状態で戦うこともないだろうし大丈夫か。ーさて」

カリオスト口の部屋を出て、今オレは自室のドアを前にしていた。

件のアンチラだが、最近はどこからともなくオレの部屋に入ってベッドに潜り込んでいることが多い。本体は昼寝の真っ最中だから、添い寝でもしていることだろう。

……全く。大人ぶってはいても結局は甘えたい年頃のお子ちゃまなんだから、そんなに警戒する必要ないっての。

ほら。部屋の中からいつも通りの可愛いアンチラの声が聞こえる。

「うひひ、キミは本当に気持ちよさそうに寝るね。……今はビイもルリアもカタリナもみーんな、甲板にいるのに。そんな無防備にされちゃうとーボクもうそろそろガマン出来ないよ?」

……。

「ボクはまだ結婚出来ないけど、グランから×をお腹いっぱい貰って、＼きせーじじつ＼を孕めば実質結婚みたいなものじゃ。ってアニラ姉ちゃんに教わったんだー。まあそもそもキミはボクのウンメイのヒトだし？　しようがないから、ボクが面倒見てあげます」

……あれ？

「うひひ、えひひ……っ♡　キミと夫婦になったら、子どもは最低3人は欲しいなあ。そして家族に囲まれながら、お役目が来るたび一緒に忙しいを分け合って、ゆくゆくは子どもたちがお役目を継いでいるのを見守ってえ……。んう、あはあ♡　素敵な未来を想像したら、丹田の奥がキユンキユンしてきちやつた♡」

本能の部分が警鐘を鳴らした気がした。

不穏な空気を察し、そーっとドアを半開きにする、

「素敵な式にしたいね。豪華じゃなくていい。一生の思い出になるような、ね？　あ、式場の心配はしなくて大丈夫だよ。キミはボクの社の大黒柱になるんだから。」

気が早いけど新婚旅行はどこにしよつかあ。特に希望がなければボクはやっぱりアウギユステ列島かなー。海の見える温泉で一緒にーなんて。えへへー

ベッドの上。寝ている俺グランの体のそばにアンチラはいた。

ただし。

添い寝とは違う、覆いかぶさるような体位。ただでさえ際どい衣装をはだけさせ、小さな体で出せるだけの妖艶さをまとった少女の紅潮した横顔と荒い息遣いは、これからの行為を容易に想像させた。

そして想像が実行に移されるのも時間の問題だった。ブツブツと愛の言葉を囁きながら、アンチラの右手はツーツと吸い込まれるように俺グランの下腹部の奥に伸びていつてー

「あばあぁー……っ?!?!」

それ以上はいけない。アンチラの教育にも、規約的にも。

俺グランの体から引き剥がし、すぐさまアンチラの乱れた服を正す。

不純異性行為はいくらなんでもアンチラには早すぎである。行き過ぎないうちに大人として叱らねば。

あとアニラ。お前マジでなんてことを子どもに吹き込んでるんだ、バカか！ バカだろ!?

「あ、あはは、はは……っ！ もう、アンチラってばまだ寝ほけるのかな？」

つい先ほど聞いた「アンチラの狂愛」というカリオストロの忠告が脳裏をよぎる。

いやでも、アンチラは良くも悪くも素直な子だからな。今回は魔が差しただけに違いない。うん。

さしあたってあの淫乱羊の言うことに耳を傾けるな、とちやんと諭せばわかってくれるだろう。そして普段通りの様子に戻るはずだ。

ほら。いつも通り説教すれば、アンチラはオレの話を最後まで聞いて……

「ダメじゃないか。まだまだアンチラは子どもなんだから、そういうことはまだ早いぞ！ 本当に大切な人と、もっと大きくなってかー」

バアアアーンツツ!!

……てくれなかった。

黙れ、と言わんばかりにアンチラの手のひらから伸びた如意棒が耳元を掠め、グランの部屋に新しく空洞と亀裂を生み出した。

「ああ、^{ごめん}めんなさい。あとで補修しておきますのでおかまいなく」

……!!???

「それで、ボクとグランの部屋に勝手に入ってきた貴女は何ですか？」

どこまでも暗い瞳、純粋な殺意。

普段の快活な声とは打って変わって、へアブソリユート・ゼロよりも冷たい声が淡々と紡がれる。

うん。声を大にして言いたい。……この娘だね!? どこー!? 素直で快活なアンチラはどこー!?

「オ、オレはジータ。ーほらあれだ……グランの姉だよ」

「ほんとですか?」

猜疑心。殺意。一切の嘘を許さないという眼差しが、こちらの思考を見透かそうと突き刺さる。

なぜそんな瞳孔をおっぴろげた無表情で聞くんか。怖いぞアンチラ。せめて訝しげな表情を浮かべてくれよ。うわずった声を出しちゃったじゃないか。

「あ、ああ。こいつとは切っても切れない腐れ縁なのさ……」

「そんな話は一度も聞いたことがありませんが?」

「そ、そりゃ、グランのやつが恥ずかしかつてんだよ! コイツにしたって、こんな放浪癖のあるダメ姉のことはあまり人に触れたくないんだろうし。あ、放浪癖つてのはな——」

今だけはカリオストロに感謝である。

彼女作のジータ設定集をつらつらと話す。いつものアンチラなら、すぐに相手のことを信用してくれるのだが、

「ふーん。じゃあどうしてボクとグランの部屋に？　どんな緊急な用が？　手紙で済まない用ってなんですか？」

「え？　あー……大事な用ね。うん、えーつと……」

矢継ぎ早に次の質問が飛んでくる。

……おかしい。オレはアンチラとお喋りするつもりで来たワケで、決して尋問されるためにきたワケじゃないのに、なんだこの状況。

言いよんでいると、アンチラは無言のまま距離を詰めて来る。

部屋の壁に追い詰められたオレは一步も動くことができない。指先を一つでも動かせば、目の前の闇に喰われる。そんな予感が、体を石化させていた。

「すんすん、すんすん。……色々臭いますね。なんでカリオストロさんの服を着てるんですか？　これアイツのですよ？　しかもグランに似せた服。それにヘンな薬品の匂いがします。キミの吐息から。もしかしてアイツが偽物を用意して、ボクとグランの邪魔をしようとしているのかなあ？　アイツがボクの頼みを一度も聞いてくれなかったのも、ボクの邪魔をするためー」

あれえ？

いつもの「キミはいい匂いがするね！」

いつまでもモフモフした

くなるよお（満面の笑み）」って擦り寄ってくれるアンチラはどこ……どこ……？

「というかヤバイ、ヤバイよね？ ヤバくない!? エルーンってそんなお化け嗅覚してたっけ!? 早く脱出しないとー!」

久々の命の危機に息を飲むと、アンチラの暗い瞳があるものを捉えた。一方的な会話が止まる。

「?」

「ーその刀は」

凝視しているのは、オレが倉庫から引つ張り出したお古の刀。初めて手に入れた記念品ってことで保管していた、思い出補正付きのガラクタである。

もしかして、俺の刀グランって分かるのか……? ならー

「ん、あ、ああ! あーこれはグランのやつから貰ったんだよ。使わなくなったから修行用に使えば? ってな」

「……」

「そうだ! 今日のはたまたまグランの騎空挺を見つけたから、この刀をグランの奴に返しに来たんだよ! オレはオレで修行用の刀を手に入れたしな」

口実を作って、

「見たところ、アンチラはグランと仲良いんだろ? 今考えたらこの刀をグランに返し

でも迷惑だろうし、良かったらアンチラが貰ってくれないか。一応グランの初めての記念品だし」

撒き餌を用意して、

「じゃ、オレは修行に戻るから。あとはよろしくな！」

今から邪魔者は帰りますよアピールをしつつ、欲しがり屋さんの目をしたアンチラに刀を渡す。

子どもという生き物は、目先の欲しいものを与えるとそちらに心が奪われるものである。それはたとえアンチラといえども例外ではあるまい。というか、奪われてくださいお願いします。

「なるほどー！ それじゃあ遠慮なくいただきますね！ ……うへへへ、えへえ♡ グランの初めて♡」

「……ふう。あ、それじゃあ、オレは、このへんでー」

キラリ、と鈍く光る刀身に歪んだ笑みを映す。柄の部分に頬ずりする様はまさに「病み属性のアンチラ」

思惑通り注意が完全にそれたことを確認して、不気味な笑い声をあげる彼女を刺激しないように、抜き足差し足で自分の部屋から逃げ出そうとする。目先の危機は回避出来たらしい。

あーこれからどうしよ……いや、これからのことを考えると頭痛が痛いレベルの話で済まないくらいキツイ。今のオレは冷静に見て底なしのドロ沼にハマっている阿呆である。はああ、今更カリオストロの忠告が沁みるう……。

命の危機が訪れるたびフル回転してくれる自分の頭脳に感謝しつつ、身近な狂気を放つておいた自分を呪いつつ、ドアノブに手をかけてー。

「あ」

「ーっ?!」

「これからも未長くよろしくですね。お義姉ねえさんっ?」

が、お古の刀にウツトリだったはずのアンチラはいつの間にか背後に回っていた。

耳をくすぐるような甘い声で囁き、絡みつくように肩を掴む小さな手は、決して拒絶を許さない。ギギギ、ときこちなく振り向くと、いつも通りの、純粋な笑みを浮かべたアンチラの顔が目一杯に広がった。

「……あ、ああ」と歯切れの悪い返事と苦笑いを部屋に残して、今度こそ部屋を脱出する。冷や汗が止まらない。

荒ぶる心拍音を抑えながら、カリオストロの部屋にダッシュで戻る。

勢いよく部屋に入って扉を閉めると、扉に背中を預け、へなへなと座り込んだ。

「ようやく気づいたかな? 団長さん☆」

「……。……助けて欲しいなあ、なんてー」

「知るか、自分でなんとかしろ」

「殺生なっ！」

犬猿の仲

「やだやだやだっ！　　いーやーだ！　　お願いっ！　　おねーがーいー！　　助けて、何とかして！　　手伝ってー！」

「だーっ！　　うるせえなあ!?　　もともとお前がまいた種だろうが！」

実に正論であるが、この際、恥も何もあるまい。

クムユにも負けないくらい腕をポカポカと振り回し、カリオストロに泣きつく。もちろんジータの状態で。

アンチラ（病み属性ver.）という、かのバハムートにも匹敵する（※個人差あり）強敵との遭遇からしばらく。

俺はアンチラ事件解決の目処めどすら見つけられないままだった。

いや、俺だって頑張ったんだよ？　手持ちの70万ルピ全てをアンチラ事件に当てたくらいだ。だが、事態は良くなるどころか悪化の一途をたどっていた。

なんと（予想出来たことではあるが）、お義姉さんの登場でアンチラのアタックが積極

的になってきたのである。

それはそれは鈍いと言われたオレでもわかるほど、彼女は浮ついていた。
今朝会った時だって、

「すんすん。あれ、どうしたんですかお義姉さん薬品の匂いに混じってキミからグランの匂いがしますよ？　もしかして夜遅くにグランと何かお話でも？　正式な縁談ですか結婚話ですか？　お義父さまとお義母さまの許可が降りたとか？　もう、遠慮しないでボクにも話してくださいよ家族じゃないですか」

「……何でもないよ、アンチラさんや」

あな恐ろしや、エルーンの嗅覚。

ただグランとの記憶共有のために数分一緒にいただけなのに、この勘違いよう。今のアンチラは、ケツコンという餌を前にした肉食獣がごとし。

……とまあそんなわけで、ジータに化けたまま元グラの体に近づくことも難しくなり、アンチラ事件の収集もつかなくなり、カリオストロに泣きついている次第である。

「うう……お願い、じばず。何でもしませんが……」

「……。……」。わあつた、わあつた。モルモットが使えなくなるのも困るしな」

「いやっほう！　カリオストロ大好きー！」

「んなあー！ 抱きつくな、顔を埋めるな馬鹿っ！
ろだぞで」

「ん、なんか言った？」

「なんでもねえよ！」

へんなの。

まあとにかく協力者ーしかもあのカリオストロの力を手に入れたのだ。今はこの僥倖を喜ぶことにしよう。

「ふふふ、これからよろしく頼むぞ、相棒」

「……はあああ。なんでこんなことに」

「なんだよ、開祖様のくせに情けないなー」

「あーぶつとぼしてえ、コイツ」

頭を抱え、がっくりとうなだれるカリオストロ。

聞けば、流石の開祖様でも十二神将アンチラとの敵対は避けたいらしかった。まあオレの尻拭いの手伝いをせがんでいるのだ。これ以上の無理強いは気がひけるといふもの。

てなワケで、ジョータが計画立案と実行を担当。カリオストロは計画立案もしつつ、アンチラに気取られないよう裏で実行の手伝いをするという形で落ち着いた。

……クソ。そういうとこ

「よし！ アンチラ対策チームも結成したことだし、一発目の作戦はオレのとおきのやつで行こうか」

「……まあ、一応聞こうか」

これは異世界の偉い人の言葉だが『数多い恋人の情も、友情の火には及ばぬ』というものがある。

要は人間恋心より友情。もう手遅れ感はあるがあえて言おう。まだ舞える、と。というわけで、かねがね実行しなかった作戦をさっそく実行に移すぞ。

「名付けて愛情より友情作戦だ。むふふ、病み属性といつても所詮は子ども。恋より友達、愛より楽しいだろ。他の十二神将の子たちと仲良くなれば、全て解決すると思わないか？」

「なるほどな。……こりやいつまでたつても解決できないワケだ」

むむ、またボソボソと独り言を……まったく。

「でな。マキラは今帰省中だから、ヴァジラとアンチラをくつつけようという作戦なんだが、なぜかアンチラと一緒にいるときはヴァジラと会えなくなるんだよ。逆も然りだし。そこでだー」

「はあ……あーはいはい。いーんじゃねえの？ 会わせてやるよ」

ははーん。自分で言うのもなんだが、これは天才カリオストロも嫉妬するレベルの完

壁な作戦なのであろう。その証拠に、カリオストロもそつぽを向いたまま不機嫌そうに答えていた。オレに発想で負けたのが悔しいに違いあるまい。

これでアンチラ事件も解決だな。

「だろお？　そうと決まったら早速――」



「メス犬さんは部下のワンちゃんにでも腰を振ってれば良いんじゃないですか？　脳筋のワンちゃんには良くお似合いですよ」

「そつちこそ。団長にヘコヘコ腰を振るのをやめろメス猿が。お前みたいなガキが神聖な団長に釣り合うとでも思っているのか？」

「……番犬は家の外で飼われるモノだって躡けないといけないみたいだね」

「害獣風情が吠えるじゃないか、○ツチが」

「はあ？」

「ああ？」

「――天地神明、須らくこの声を聞け！　金牙神然！」

「――天地万象、この世の理を知れ！　金牙神然だあ――！」

「ちよいちよいちよーい!」

友情壊れるう。

とつさに二人の間に入り、如意棒と刀を受け止める。

狂つても十二神将なわけで、このまま放つておくと周りにまで被害が出てしまう。具體的に言うとう格蘭サイファーが壊れて俺がラカムに怒られる。全く、強者同士の喧嘩はこれだから困るんだ。

あと俺を挟んで唸り合うのもやめてほしい。

あーどうしようどうしよう。この場を凌ぐには――

「ヴァジラ、ステイ!」

「わん!」

「アンチラ、あとで相手してあげるから! 俺の部屋で待つてられたらご褒美あげるから!」

「!! あはあ♡ もう、わかったよ格蘭。しっかり、用意して、待つてるよ?」

効果はバツグンだ!

アンチラは殺気を引つ込め、ウツキウツキな様子で俺の部屋へと踵を返した。彼女の蕩けた表情と、裏切りを許さない声は――この選択はチョンボだったかもしれない! もう取り返しつかないけど!

後始末を思うとため息が止まらないが仕方あるまい。

アンチラがいなくなつたところで、律儀にお座りまでして待っていたヴァジラの方に
向き直る。先程の殺気オンリーの瞳とは打って変わって、彼女の瞳はキラキラ輝いてい
た。

まるで外敵を追い払つたのだから褒めてほしいと言わんばかりに――

「はあ……んー、あー、ヴァジラさんや」

「なんだ団長！ わしもご褒美が欲しいぞ」

「な、なんのご褒美かな？」

「団長を困らせる害獣を追っ払ってやったぞ。凄いだろう」

言っちゃつたよ。

……あーもう、滅茶苦茶だよお！

俺の予定では意気投合した二人が一緒に鍛錬を重ねて、友情を交わして、絆を結んで、
次第に俺のことがどうでもよくなつて人類皆ハッピーエンドのはずだったのに!! 友
情と絆どころか、殺意と暴力しか交わしてないよ!

『ガルやちびたちはもちろん家族だけど、十二神将のみんなもそんな感じだな。そんな
に頻繁に会えるわけじゃないんだけど……不思議だよな〜!』

そう言っていたヴァジラさんはどこ……どこ?!

……。待て待て待て、現実逃避はいけない。

マキラは現在実家に帰省中。したがってヴァジラが友情を築けなければオレの貞操の危機なのである。

今日は大失敗に終わったが、なんとしてでも、ヴァジラとアンチラにはくっ付いてもらわなければ……！

「な、なあ。ヴァジラ。俺に懐いてくれるのは嬉しいけど、やっぱり同じ十二神将のアンチラと……も、もう少し仲良くしてもー」

「いやだ」

この即答である。

「団長はわしの目標で、ただ一人の主あるしさまなんだから。それをあんな盛りのついた子猿に取られるなんて、絶対に嫌だね」

「えっ、あれ？ ヴァジラの主神さまって、確か犬神だろ？」

「何を言っているんだ、主神は犬神に決まっているだろう」

……。あれ、なんだろう。なんか、すごく嫌な感じがする。

アンチラの件で敏感になっている俺の嫌な予感センサーは、ピンピンと警鐘を鳴らしていた。ただの杞憂ならいいが……。なんだろう、この違和感？

「全く、忘れたのか？ 団長がわしと出会った日に言ったんだぞ。自分が、わしの目標に

でもなんでもなつてやるつて」

「あれ、そうだっけ、か……」

全く心当たりがない俺をよそに、ヴァジラは胸に手を当て語り出す。



犬神宮のもとに生まれた子の宿命。

それは強くあること。誰よりも強者であること。

それが主神たる犬神——鬨神のもとに生まれたわしの定めだった。

それ自体思うところはない。それが当たり前だと思っていたし、強くあれという考え方に拒否感もなかった。

だから、父親との手合わせだつて仕方ない。祖父からの説法と指南に日々を費やすのだつて仕方ない。

『お前はこの鬨神の一族の子として生まれてきたのだ。だからこの犬神宮の巫女として、使命を果たすことだけを考えればいい』

『……はい』

『話にならぬわ。お前に涙などいらん、そんなもの流している暇があったら、犬神の巫女として強くあれ』

『……はい』

そうやって毎日毎日、ズタボロになったとしても、全て仕方がないことだと己を律して生きてきた。

強くなれば

きつと認めてもらえる。きつと褒めてもらえる。島の子どもたちのように。

そのためには、今は修行を積むしかない。

強くなることがわしの生きる意味で、弱いわしに価値なんてないんだから。

——でも、ある日。

父親も祖父も討ち果たして、力を振るう場所も相手もいなくなったわしが覚えたのは、達成感でも優越感でもない。ひどい虚しさと孤独だけ。

家来や家族、世話係の女中たちは言いつけ通り強くなったわしを、褒めるどころか遠ざけ始め、家では一人。外では巫女として祀られる日々が待っておったのだ。

うーんと小さい頃に引き合わされたガルジュナはもちろん、そばにいた。十二神将同士の交流もあった。けれど、ぽっかり空いたままになっているわしの心を満たしてはく

れなかった。

きつと強くなれば全てが変わると思っていたのに。ますます何のための14年だったのか、分からなくなる一方だった。

……でも、そんな頃にグランは来てくれたんだ。

忘れもしない。あの年初めの日さ。

「巫女様……」お役目さま……と囁し立てる烏合の衆たちと同じように参拝しにきてくれたんだよな。

雑踏の中でもお前たちは不思議な匂いを漂わせていたから、いやでも鼻についたさ。

「なあお前」

「俺のことか？」

「そうだ。見たところ随分な腕前のようにだし、わしと一戦勝負してはくれんか？」

「おー、いいぞ」

今思い返せば、ひどい言い草だったなあ。戻れるものなら、あの時のわしを滅多斬りにしたいくらいだ。

ただ、久々に滾る戦いだったのは確かだったぞ。そして、わしが負けたこともな。

その時に、グランにかけられた言葉は一生忘れないよ。

「その歳でその剣さばき。修行も大変だっただろ？ 凄いよ！ 尊敬するぜ、ヴァジラ」
今思えば、なんでもない一言。

ただその混じりつけのない賞賛は、他でもないわしヴァジラに向けられていて。

初めてかけられた労いの言葉に、わしの目からは、とうの昔に忘れてしまった涙がボロボロと溢れてしまったんだ。

「ちよちよ、なんで泣くのさ!？」

「うわあああ……！ あああああ!!」

「あー、んー、よしよし。ほら胸くらいなら貸すよ」

久々に、いや。初めて声を上げて泣いたわしが落ち着くまで、グランは隣にいてくれたんだ。たった一回戦っただけの、見ず知らずのわしに対して、何も言わずにわしの頭を撫で続けてくれた。

グランの体は冬だけど暖かくて、とても良い匂いがした。

そうして、泣き出したわしからきつとグランは全てを悟ったのだらうな。わしの話を聞き、また声を掛けてくれたんだ。

「もっと自分を誇るべきだ、ヴァジラ。今まで頑張ってきたその努力は絶対に誇れることだし、それに……強さは一つじゃない」

「一つじゃ、ない？」

「ああ、腕つぶしが全てじゃない。ヴァジラは女の子なんだから、もつといっぱい笑って、オシヤレして、友達と一緒にいるべきだよ。それも、君の強さに繋がると思うぜ？」

グランがわしに優しくしてくれた。

「なあなあ、ヴァジラ。俺と一緒に空の果てを目指してみないか？」

「空の果て？」

「ああ。長い旅だ。ヴァジラはまだこの島だけが世界なんだ。色んな場所で色んな人と出会えば、きっとヴァジラはもつと強くなる」

グランがわしに道を示してくれた。

「俺は神さまじゃないから、何かを施したりとかは出来ないけど。まあ、褒めてあげたり鍛錬の相手くらいなら出来るからさ、頼りたい時は頼ってくれよな」

グランだけが、わしのことを想ってくれた。

「ヴァジラの目標にでもなんでもなつてあげるさ。だからよろしくな、ヴァジラ」

グランだけが、ヴァジラわしのことを必要としてくれたんだ。

ーそして。

「この船の団員になつて、生まれて初めて！ 団長のため、団長を想つて刀を振るつた時。わしに道を示してくれた団長に褒められた時。何にも感じてくれなかつたわしの心が震えた！ ……すぐに気づいたよ。団長こそがわしが仕えるべき相手で、わしはこの瞬間のために頑張つてきたんだつてー」

年相応の屈託のない笑みを浮かべたヴァジラは、立ち尽くす俺の胸にふわりと、顔を埋めた。ヴァジラの髪の毛の匂いが香る。彼女は顔を埋めたまま大きく息を吸いこんで、顔を上げた。ヴァジラと、目が合った。

「だから、その時誓つたんだ。わしはこの身が朽ち果てるまで、団長に忠義を尽くすと。だつてグランは、わしだけの主さまなんだから！」

あー……これは。これは……。

「団長のためなら何でもする！ 団長が望むなら、性欲のはけ口でも万物を切り裂く武

器にでもなる。どんな命令だって喜んで従うぞ。――だから、スタボロになる心ゆくまでわしを使つて欲しい！」

ヴァジラのひとみは まっくらだ！

グランは

めのまえが まっくらに なった！

淫靡な羊は困り顔が好物

「で、『数多い恋人の情も、友情の火には及ばぬ』だったか？」

「……はい」

「おーおーそうだな。じゃあ、こんな格言を知ってるか？ 『犬猿の仲』ってやつ」

「……調子に乗ってすいませんでした」

場所はいつも通りカリオストロの自室。

呆れたようにため息を吐く彼女の前で、オレは正座をさせられていた。

「つたくよお、ヴァジラとアンチラが恋敵同士なことくらい理解しとけよ！ というか、男が女に違う女を紹介するとかありえないだろ！ しかもよりによって恋敵を！ つくづく女心を分かってねえ野郎だな」

「……カリオストロは元男じゃん」

「あ、なんだって？」

「いえ、なんでもないです」

カリオストロが手元の資料に目を落とす。

机の上に広げられた大きめの羊皮紙には、オレを中心とした人物相関図とヤンデレたちの情報がまとめられている。

ルリアノートの力も借りつつ、二人で作成した代物だ。

「……とはいえ、まさかヴァジラまでぶっ壊れてるとはな。完全に誤算だったぜ」

「ホントだよな。何が原因なんだか」

「鏡でも見とけアホ団長」

インクに浸した羽ペンで情報を書き加えると、カリオストロが困ったように頭をか
く。

一人でも対処に困るヤンデレが二人に増えたのだから、頭を悩ませるのは至極当然のこと。

まったく、原因を作ったやつ顔を見てみたいもんだぜ。

姿見を見た。ジータが映っていた。かわいい。

……視線を戻す。依然として、カリオストロの視線は相関図の上を泳いでいるよう
だった。

オレの尻拭いのために頭を回してくれているらしい。ありがたいことである。

「……仕方ねえ、オレ様に一つ案がある」

「おおー！」

カリオストロが大義そうに立ち上がった。

そのまま部屋に用意してある黒板の前に移動すると、チヨークを取る。

「あのな、恋つてのは戦争だ。団長、戦争で一番最初に叩くべき場所はどこだ？」

「んー食料庫とか、敵の大将とか参謀とか……」

「そう。敵勢でもっとも影響力を持っている場所だ」

カリオストロは不敵な笑みを浮かべると、己の智慧を黒板に書き連ねていく。

第二作戦の開始だ。



そうだ。オレはハナから間違っていた。

今、オレが抱えている問題は周知の通り、アンチラ（とヴァジラ）の狂愛をどうするかだ。このままいけば、リーシャたち率いる秩序の騎空団に大変不名誉な罪状で目をつけられるのは必至。

では、そもそもなぜ、アンチラやヴァジラがインモラルに迫ってくる事態になったのだろうか。

彼女はまだ9歳という「赤ちゃんってコウノトリが運んできてくれるんでしょ?」と信じていてもおかしくない年齢のはずである。

ヴァジラだつてそうだ。話を聞く限り、彼女は鍛錬の中で生きてきた少女だ。性欲のはけ口、なんて言葉覚えるわけがない。14歳だし。

であれば原因を探ってみよう。

あの純真無垢な子どもアンチラちゃんが、児ボ法に喧嘩を売っているのはなぜか。

あの明朗快活な少女ヴァジラちゃんが、レーティングを無視するのはなぜか。

答えは明らかであるー。

「やいこらあ!! アンラ、出てこい!」

「……なんじやなんじや、騒々しいのう。……む、そなたはー」

自室の扉を開き、姿を現した少女。

とろけるようなタレ目とマロ眉。羊を思わせる巻角とウエーブがかつた金髪。そして小さな体躯に不釣り合いなほど、たわわと揺れる二つのもの。

彼女の名はアンラ。

アンチラたちと同じ、十二神将がうちの一人である。

この数週間の調査で、彼女がヤンデレでないことは調査済みだ。

だが困ったことに、タチの悪さで言ったらコイツ以上の存在はありえない。あのヤンデレどもと肩を並べる厄介さの理由は至極単純で、

「グランの姉じゃったか？ ……ふむ。部屋まで押しかけるとは、もしかして我を襲いに来たのかの？」

「違う。お前に話があつて来たんだ。アンチラたちの件でな」

「よいよい。まったく、どうしようもないロリコンの変態さんじゃのお。こんなロリ巨乳の童女と百合プレイがお望みとは」

「どうしようもない変態はお前だ」

「揉みしだくでも、舐めるでも、指でイジるでもよいぞ？」

「あーもう、話にならないよ!! いいから黙って入れさせろ！」

「挿入いれされる？」

「……はあ」

頭の中がピンク一色で、どうしようもない変態さんであることだ。

もはや歩く猥褻物。

これが本人だけの問題ならまだしも、何を思ったのか、コイツはヤンデレども（特に

アンチラ)にそのような知識を吹きこみやがっているのだ。

おかげでアンチラの淫乱度にますます磨きがかかっている始末。

今朝も「ねえ早くシようよお。ボクもう初潮は迎えたよ?」と迫ってくるアンチラの対処に苦労させられた。まったく、教育に悪いつらありやしない。

それらを考慮すれば、コイツの処理がマストであることは明らかであろう。

同じ十二神将の、そういった知識の出どころであるエロ魔神アニラの口を封じ、彼女にアンチラたちの暴走を止めさせる。

それが今回の作戦だ。

この作戦の立案者であるカリオストロには人払い。グランにはヤンデレたちの露払いを担ってもらい、今回はジータ単騎で説得に挑む形だ。

変態とはいえ、巫女を務める人の子。

「たった一人の身内が間違いを犯す前に止めて欲しい」と情に訴えかければ墮とせるだろう。

うむ、さすがカリオストロ。完璧な作戦だあ。

「とりあえず、部屋に入るぞ」

「うむ、かまわんぞ。グラン」

……早速作戦にアクション発生だあ。

「え、あれ？　　お、おいおい、なに言ってるんだよ。オレはグランの姉のジータ！

どこに間違える要素があ、あるんだぜ？　全然似てないだろ」

「くふふつ、愛い奴よのお」

え、うそ。バレた？　本当にバレたの？　なんで？

アニラが不敵な笑みを浮かべながら、後ろ手で部屋の扉を閉める。これで個室に二人きり。

当初の予定なら、ここからカリオストロの台本に沿った説得に入るのだが――

「だから……そ、そんなワケないだろ。な、何言ってるんだよアニラ。ほら性別だって違うし？　　ココ、コレが嘘ついてる目に見えるか？」

「んんー？　よく見えんのう」

「ほら正直者の目だぞ。ほら、ほーわふつ!？」

……ぼふん。と視界がひっくり返る。

それは突然のことだった。

アニラがオレに飛びついて来たのだ。

あまりのことで受け止めきれず、彼女の柔らかな体ごとベッドに押し倒される。二人分の体重を受け止めたベッドが軋んだ。

むわつとした甘い匂いが鼻腔を満たす。

アニラのシーツはぐちゃぐちゃに濡れていた。

「な、何を」

「くふふつ。我は十二神将の中でも、特に星見の力に優れておつての。よくグランと、連れのルリアの星の力を感じておつたのじゃよ。ーちようど、今のそなたの身体から感じるものと全く同じものを、な」

ほ、星の力？　　そんなの感じたことなんかー

「……つてことはつまり、もしかして。最初からバレてた？」

「くふふつ……ま、安心するがよい。今のそなたをグランと見破る者はそうおるまい。星の力も我ぐらいでなければ気づかれぬだろうよ。ただー」

ニヤア、とアニラが口角を釣り上げる。

「これが団員の皆に知れたらどうなるかのう？　おなじ女子に化けて、女ドラフと「編集済」した変態ロリコン野郎、と」

「んなつ?!　そ、そんなデタラメ誰が信じるとー」

「おやおや、衣服を我の愛液で濡らして、全身からむんむんと我の匂いを漂わせるそなたが何を言ったところで、エルーンの者たちには全て察せられるであろうなあ」

「あい……えきつー」

瞬間、押し倒されたベッドのシーツがぐしよぐしよであることを思い出す。

コイツまさか……は、ハメられた！

カリオスト口のそれとはまた違った、愉悦マシマシの邪悪な笑み。

嫌な汗が背中の中の衣服をべったりと張り付かせているのを感じる。ぐつしよりと湿らせているのは果たしてオレの汗なのか、アニラの体液か。

身の危険を感じ、本能のままマウントを取られた体勢から抜け出そうとして、

「んっ♡ イッたばかりで、今は敏感でな。あ♡ あまり暴れんでほしいのう」

……抵抗はやめることにした。

よくよく見てみれば、彼女は額に汗粒を浮かべ、顔は妙に赤らんでいた。息も少し荒い。クソ、エロ魔神め。

「まあまあ落ち着くが良い。分かっておるよ。口外されたら色々と困るのであろう？

そなたは我の恩人じゃからの。別に言いふらすつもりはないぞ？」

絶対嘘だろ。

「くっつ——じゃが、何か一つ我のお願いを聞いてくれぬと、うっかり漏らしてしまうかもしれないのお」

「くっつ、卑劣な……」

やっぱり嘘じゃん！

「コ、コイツ。ここぞとばかりに見え透いた要求しやがって……！」
「くっ、何が望みだよ」

「くふふっ。そうじゃなあ、我と契りを結ぶ、というのはどうじゃ？」
「ん？……えっ。そ、それって」

「ぶろぼおずじゃよ。我なりの、な」

また、いつもの流れで冗談みたいなやらしい無茶振りをしてくるのかと思つていたのに、プ、プロポーズ!!

拒否権のないプロポーズってなんだよ！

ヤンデレじゃあるまいし。

……もしかしてからかっているのだろうか。

訝しげな眼差しとセットで、何か一言ぐらい言い返してやろうと口を開こうとした瞬間、アニラは密着するように身体を重ねてきた。

もふもふの身体がオレに擦り付ける。

「我ならば、アンチラと折り合いをつけるのも容易であろう。同じ十二神将同士、ヴァジラの件も丸く収まるかもしれぬ」

「！」

「なあ、どうじゃ？」

「グラン？」

耳元で、鈴を転がしたような柔らかな声が囁かれる。

彼女の吐息がかかるほどの距離。ガラス細工のように繊細で、小さな手がオレの手を絡め取る。

たわわと実った双丘がふにゆう、と押し当てられ、柔らかな感触と熱が服越しにでも伝わってきた。

上目遣いの彼女と目が合う。これはまさか……本気なのか？

「もちろん仮初めではない。私も本気でそなたを愛しておる」

「っ!？」

「辛いなら私も手伝おうぞ。試練をこなすには助け合いも大事じゃ」

「え、あえ……」

いつもの変態具合はどこへやら。真面目なトーンで彼女は語った。

困惑のあまり言葉も出ない。

ただ言われてみれば確かに。彼女の言う通り、この誘いを受ければ全てが解決するように見える。だが本当に、それでいいのだろうか？

……

……いや、駄目だろ。そんな不誠実な考えじゃ、アニラにもアンチラにもヴァジラにも申し訳が立たない。特にアンチラたちは、形が少々狂っているとはいえ、純粋な思い

を持っているのは確かなんだから。

まずは彼女たちの想いにちゃんと応えなければならぬ。たとえジータの秘密がバラされたとしても、この誘いは断ろう。

断るのも男の仕事だ。

「その……ごめん。悪いけど今、アニラのその提案は、その、受けることは、できない……アンチラたちに、まずは答えを出さなきゃ」

「~~~~~あはあ♡♡」

「と、ともかく、えつちいのは禁止！ めっ！ そういうのはグランさんまだ早いと思うから、違うお願い……を？」

色恋沙汰に真面目に向き合うのには慣れていない。顔が熱くてたまらない。

ところが、言葉を選んでいる最中、たまたまアニラの嬌声が聴こえた。表情が目に入る。

先ほどと同じ、愉悦のキマった顔。声に出さずとも、イタズラ大成功という声が聴こえてくる。これは——

「くふくふくふつ！ 冗談じゃよ。愛い奴めっ！」

「じよ、冗談？」

「おやおやあ？ もしかして、我に本気で惚れられたと思ったのかの？ 先走ってし

まったかのお？ これじゃから変態を拗らせた童貞はー」

凶星を突いてくる。羞恥心を刺激するように、小馬鹿にした声音でチクチクと。

「顔を真っ赤にして、可愛かったぞ？」

「くくくツ!! うるさいうるさい!! アニラのばーかばーか! 変態! エロ魔神
!」

「んああん♡」

早々に羞恥が限界値を超えた。

喘ぐ声も無視し、覆いかぶさっていたアニラを押しつけダツシユ。部屋の扉に手をかける。

ちくしよう、オレを弄んだな! もう知らん! 謝っても絶対許してやらないからな!

今すぐにも、アニラをボコボコにしたい衝動に駆られるが……今はこれ以上自分の顔を見られたくなかった。

なにか大事なことを色々と忘れている気がするが、構うものか。そそくさとアニラの部屋を逃げるように後にした。



「くくふっ、愉快愉快」

ジータ^彼が去つたのを見届けてから、押し込めていた笑い声を漏らす。

どうやら彼は我がヤンデレ事件の黒幕と考えておるようじゃが、全くの見当違いで片腹痛い。

我が^{われ}実際にやったことは、アンチラとヴァジラ^{そそのか}を唆した（それと少しの性知識を与えた）だけ。こちらとしても、随分と愉快なことになったと驚きを隠せない状況だ。よもやヤンデレとはの。

「僥倖じゃのお。ヤツには感謝してもしきれん……くくふっ」

彼女たちの歪んだ愛は、もちろん本人たちの気質もあるうが、間違いなくヤツが読み漁り、彼女たちに吹き込んだ耽美^{エロ}本の影響だ。

我也借りて使つたことがあるから推察は容易い。まったく、ありがたい話だ。これでもつともつと、彼は困り果ててくれる。

先の彼の困り顔を思い出す。

ぐるぐると目を回して、拙い言い訳を考える表情。

私のプロポーズに初心^{うぶ}らしく顔を紅潮させて、慌てふためく表情。

アンチラの想いに応えないと、と消え入りそうな声で私のプロポーズを断ろうとする

純情さ。

そして、私の冗談に踊らされ、恥ずかしきで耳まで真っ赤にしたあの表情……！

「あそこまで困窮するさまを見せてくれると、んっ、アンチラたちをけしかけた甲斐が、あつたもんじゃ♡」

そのうえ、彼はジータという最高の玩具おもちゃまで用意してくれていた。

彼はこの秘密を少々軽く見積もっているようだが、そんなワケはない。

私は腐つても十二神将。我が大衆の前で彼の分身ジータを破壊し「グランは女子に化けて
「編集済」する変態野郎じゃー！」と一言発すれば、全空から変態の烙印を押され、グラ
ンという一人の人生が終わる。

それほどの影響力が、十二神将にはある。

それを知れば、彼はよほど無茶な要求でないかぎり私の言うことを飲まざるを得なくなるだろう。

どんな難題を突きつけてやろうか。

そのとき彼は、どんな表情を浮かべてくれるだろうか。

恩人を困らせる背徳感と、彼を組み敷いたという征服感が脳を犯し、愛液が溢れ出す。

ヒヒイロカネのような英気を持つ彼の困り顔を見るたび、ゾクゾクと子宮が疼いてたまらなくなる。

面映ゆいが、きつと我もまた「恋患こひわづらひ」をしておるのだろう。ますます体が火照る一方だ。

切なくなつた身体を持て余し、何かないかと辺りを見回せば、乱れたシーツが目に入った。先ほどまで、彼を押し倒していた場所である。

「すうう……んはぁ♡」

湿つたシーツを顔に押し当てる。

嗅ぎなれた臭いの中に、彼の面影を感じる。多幸感が脳を満たす。腰が震え、悦びの吐息も漏れた。

つい先ほど発散したばかりだというのに、もう感情の昂ぶりが抑えきれない。

「まったく、我まで可笑しくしておつてからに。この責任は、ちゃんど、取つてもらおうかの？」

次はどうやって困らせてやろうか。

そんな妄想を膨らませながら、疼く素股に手を伸ばした。

ヤンデレ被害者の会 その1

コンコン、と扉を叩く。

「カリオストロの部屋♡」と書かれたネームプレートが少し揺れて、扉の向こうでバタバタと人の動く気配がした。

しばらくして、今宵のターゲットが現れる。

部屋の主人と同じ、金色の髪を携えた人物。怨敵と似た顔立ちの少女。かのグランの姉貴、ジータである。

「お、おー……ヴァジラじゃないか。どうしたんだ？　グランの部屋は向こうだぞ？」

「いやー、今日はジータに用があつてな」

「そ、そっかー。じゃあ外に行つて話そうか」

「いやいや、そこまでの用ではない。とりあえず中に入れておくれ」
「でもカリオストロもいるし……」

「まあまあまあ」

浴る彼女を遮るように、強引に部屋へと侵入する。

案の定、彼女は油断していた。それはそうであろう。この身体はヴァジラだが、中

身は私なのだから。

無防備な彼女の背中を見つめ、ニタアと笑みが溢す。

……これで、いつも通りの平穏が取り戻せる……！

◇

私たちは、森にいる。

鬱蒼とした緑。こすれ合う葉の音。時折木漏れ日が差し込んで、小さな水溜りに反射する。

そんな自然そのままの地には原生動物のほかにも、人々を襲う魔物たちが巣食っている。

……いや、正確には巣食っていた、だろうか。

「ガルウ、見てみろー！ 敵の大将を討ち取ったぞ！ これでグランに褒めてもらえるかな？」

全身を返り血で真っ赤に染めた少女が勝鬨を上げる。無邪気な声と笑顔で。私は黙って同意する。

ーはあ……どこで育て方を間違えちゃったのかなあ。

私の名前はガルジャナ、犬だ。正確には犬と闘いを司る干支神である。

焦げ茶色の毛並の巨大な土佐犬の姿をとってはいるが、これでも神である。

そして、この血まみれの少女——ヴァジラが我が大神宮に仕える巫女だ。巫女装束のよく似合う可憐な少女。今は己の鍛錬のため、グランの旅に同行している。

今日はグランサイファアのメンテナンスのため、ある島に立ち寄ることになった。

小さな島だ。ほとんどを山と森で囲まれた島である。

旅の消耗品を補充しに村に訪れると、全体的に活気がない。困ったような顔をしている人間が多いことに気がついた。

「魔物が最近暴れていてね……でも、私たち村人にはどうにも出来ないし、こんな小さな村じゃ、騎空士を雇うお金も無いものですから」

彼女の言う通り、ここは細々とした村だった。

村人全員でのんびりと農業をしているだけで、人口も少なく、密度も低い。観光客を呼べるような物もなく、他の島との交流も少ないようだ。おかげで、飢えもしなければ富むこともない。

何とかしよう、とグランが真っ先に手を挙げた。

団長の意見に異論は無かった。同行していた私たちは、その依頼を手助けする形で森へと入った。

その結果が、ご覧の有様である

ヴァジラの右手には、醜悪な魔物の首。この辺りを縄張りにしていたのだろうが、ご愁傷様である。今や首をはねられ、どす黒い血をドバドバ吹き出していた。

踏みしめる大地は、まさに死屍累々。斬り刻まれた大量の屍と血で黒ずんでいる。ヴァジラの周囲に構える残党も血にまみれていた。異臭で鼻がおかしくなりそうだ。

耐性がない者が見れば、間違いなく吐くか気が触れるかする光景。

しかしその中心で、少女は嬉しそうにはしゃいでいた。

ヴァジラの言葉を思い出す。

『一族のしきたりでさ、うーんと小さい頃に生まれたばつかりのガルと引き合わされたんだ。

それからずーつといっしょ。だからわしのことを一番知ってるのはガルで、ガルのことを一番知ってるのもわしだな！』

……ごめん、最近お前のことが分からないよ。

「どうしたんだー、ガル。ケガしたのか？ 元氣ないぞー？」

心配するそぶりを見せたヴァジラの右手がブレる。

ヒュン、という風切り音。遅れて、一番近くの魔物が細切れになる。肉片が重力にし

たがって宙を舞い、血を撒き散らす。

ついでに彼女の周囲に構えていた残党も、首と体がおさらばしていた。

「んーにしても、手応えがないなあ。こんなんじや鍛錬にならないよー」

……描写不足なのは許してほしい。が、これが私の目に捉えられる限界である。

今のあの子の剣、どういふことか私には疾すぎて捉えられないのである。

私、闘神なのに。

あの子の主神なのに。

……まあまあそれは良い。なにはともあれウチの巫女なのだ。犬神宮の巫女が強い

⇨犬神宮の闘神の価値も上昇！

私は何をせずとも、信仰が手に入るのならば問題はなからう。

……うん、大丈夫なはずだ。多分きつと。ただ気がかりがあるとすればそれはー

「ヴァジラー！ そつちは大丈夫かーって、おお……なんとという地獄絵図」

「あ、グランだ!!」

そう、この騎空団の団長グラン。

そこらの一般人と何ら変わらない風貌であるが、その身に宿す才気は他を凌駕していた。

歴代の巫女の中でもかなりの才覚を持つヴァジラを打ち負かすどころか、「全空の脅威」と言われる十天衆と肩を並べる少年。

ヘンな匂いを漂わせていると感じてはおつたが、まさかここまでの化け物だとは。

おかげでヴァジラは完全にホの字。私たち獣が強いオスに惹かれるのはわかるが、あそこまで傾倒されるとはなあ……。

今にも「巫女辞めて騎空士になる！」なんて言い出しそうでおつかないのだ。

え、闘神なんだから巫女の鍛錬くらい付き合つて、犬神宮への愛着を取り戻せつて？ バカ言うんじゃないよ。

「ガルク、殺す気で戦つてくれないと、わしも本気が出せないぞ！」

「ガルク、グランみたいに分身してくれないか？ 1対1じゃ、イマイチ物足りなくてなあ」

「よーし！ じゃあ今日は「コロツサス・マグナ」が相手だ。ルリアの協力に應えるためにも、やるぞー、ガルー！」

「ガルー！ 今日には「フラムⅡグラス」？ つていう強い相手を用意しておいたぞ！ やるぞー！」

「今日はルリアに「シヴァー」」

ガルジャンナさん、ちよつとついていけないです。

「流石だぜ、ヴァジラ。ありがとな」

「えへへ。すごいか、すごいか!？」

「ははは。はいはい、よくやったよヴァジラ。おつかれちゃん」

グランがヴァジラの頭を撫でる。

乱暴すぎず、優しくすぎず。絶妙な力加減のそれは、彼への愛情も相まって官能的らしかった。

ヴァジラが吐息を漏らす。

(グランに褒められたグランに褒められたグランに褒められたグランに感謝されたグランに撫でられたグランの手グランの匂いー)

そんな心の声が聞こえてくるようだ。少し怖い。いや、怖い。

というより、かの実力者であるグランが妙なところで鈍感なのが腹立たしい。彼女の恋狂いに気付いていないのだろうか？

彼女は嬉々を通り越し、恍惚とした表情を浮かべていた。

「あ……」

やがて離れていくグランの手を名残惜しそうに見つめるヴァジラ。

依頼達成を伝えてくる、と言い残し彼は村へと走ってゆく。

私たちも彼にならって帰ろうか。

腰を上げ、血まみれのまま悦に浸っているヴァジラを促すように帰路につく。が、彼女は一向についてこない。

どうしたものかと、振り返ってみるとヴァジラはある一点を見つめていた。グランが私たちを見つけ、走ってきた方向だ。何かあるのだろうか……？

しかし目を凝らしても何も見えない。すると唐突に隣にいたヴァジラが口を開いた。

「ーなあ、ガル。わしの剣をどう思う」

うん、そうだね。君の太刀筋、早すぎて見えないと思うよ。

「そうだな、ガル……お前の言う通りだ。わしはまだまだ弱い」

弱くないよ。んなこと言っていないよ。話聞いて。

「今のわしでは、主神さまに顔向けできぬレベルだろう」

……うん。そうだね。むしろ私が今の君に顔を見せたくないよ。

「だが、グランのもとで修行すればわしはもっと高みに近づくことが出来る。今なら、グランとなら、どこまでも頑張れそうな気がするんだ」

そうヴァジラは言った。綺麗な笑顔を称えて。

……よくよく考えれば、ヴァジラはこれで成長？

しているのだから、これでいい

のかもしれない。

それにあの子の笑顔も久しく見ていなかった。神として、何世代もの子どもたちを見送る存在である以上、一人の子に感情移入するのは褒められたことではないが、ヴァジラには少々期待をかけすぎた。

修行と戦い以外を知らないなんて、今の時代にはそぐわないだろう。

恋する乙女。実に良い響きである。出会いは人を強くする。それは神として、何代もの営みを見てきたからこそよく分かる。

ならば受け入れなければならぬのかもしれない。

狭い世界で考え、古い世界に行動しては見つからないことは山ほどあろう。これだけの才覚を持つヴァジラに、そんな一生はあまりにも不釣り合いだ。

……うむ。もしヴァジラに巫女を辞める、と言われたとしてもそれを承知するのが道理なのかもな。

それに犬神宮の親として、子の成長は喜ばねばなるまい。

「応援してくれるのか、ガル」

その問いに、私は無言で肯定する。

なるべくは私たちの犬神宮を忘れないで欲しいが、好きなように生きるのが一番であろうさ。私たちの根っこにあるのは、自由な野生なのだから。

「へへっ、ありがとう。ガル。これからもっともーっと強くなつてアレを倒そう。もち

ろんガルとわしでな！ ……あ、そういえばガルにもわしの壮大なケーカクを話してなかつたな」

アレ？ 壮大な計画？

「実はな、誰よりも強くなつて、悪いやつや凶悪な魔物を一匹残らず打ち果たして、この騎空団の名を世界中に知らしめて、最終的には——今の犬神の首を取ろうと思うんだ」
 そうヴァジラは言った。綺麗な笑みを称えて。

「そしてグランには、その後釜に座つてもらおうと思うんだ。なつ、良い考えだと思うだろうか？ ガル」

「……」

えつ、いや、えつ？

わかんないわかんない。文章つながってないよヴァジラさん。

いやいや、いや。どんな論理を辿つた結果、主神殺して大好きな人を神にするって結論に至つたのさ!?

しかもこの暴走機関車、私じゃ止められないし！

「自分の巫女に切り捨てられたクソ雑魚干支神（苦笑）」

そんな文章が出回つた日にや、犬神宮どころか十二神の危機である。

……。前言撤回。早急にヴァジラをなんとかしなければ！



と、まあそんなわけで、私は今ジータのもとを訪れていた。

もちろん考えがあつての行動である。

作戦は以下の通り。

まずはヴァジラの身体を借り、不意をついてグランの姉というジータをめぐつたために……とまではいかないが、攻撃する。

もちろんヴァジラは責められるだろうが、それをやったのはヴァジラの身体を自由を奪った適当な「神様」のせいによいのだ。

ヴァジラがその身に神を降ろすことが出来ることと、「カミオロシ」中、ヴァジラの意識はなく、記憶も共有されないことはこの団全体に認知されている。

だが無意識下で、仲間を襲う可能性がある人間。しかも、団長の血縁者を傷付けた。

そうなれば、あとのシナリオを想像するのは容易かろう。

← 身内を傷つけられ、グランがヴァジラから距離を取る

← グランを慕う他の団員も距離を取る

← ヴアジラの肩身が狭くなり、次第に孤独を感じるようになる

← 見かねたガルジヤナさんがヴァジラに寄り添う

← ヴアジラがグラン以上に私を慕うようになり、いつも通りの日々が戻る

← ハッピーエンド！

完璧だな。昔、腐れ縁の猿神から「お前ってホント脳筋だよな（笑）」とバカにされたが、今の私を見れば吠え面かくこと間違いなしである。

唯一の不安材料であるジータの戦闘力だが、グランの血縁者だ。念には念を入れて、背後からの不意打ちならば通るであろう。

「いやあ、すまないな。急に押しかけて」

「？ 別に気にしなくても、なあ？」

「……なんでオレ様に聞くんだ」

うむうむ。これは仕方のないことなのだ。私たち千支神には、星の民の監視という重

要な責務がある。

痴情のもつれで巫女に殺されるとか、全空の恥である。

峰打ちで済ませれば、少々のケガこそすれど、死にはしないだろう。

許せ、ヴァジラ。そしてグランの姉貴よ。

怨敵に悟られぬよう、息を殺し、腰に納めた刀に手を掛ける。

狙いは未だ私に背中を見せるジータ。行ける、行けるぞ……！

「しねええええええええ!!」

◇・5分後◇

「ずびばぜんじだ……っえっぐ……もう、ヴァジラに酷いことは、いつぐ……しようとしません……」

「はあ。少しは考えなよ、仮にも神さまでしょうが。ヴァジラだって、悪気があってそんなこと言ってる訳じゃないんだから、そんな酷いことやっちゃダメだよ」

「はんぜいじばす……ごべんなざい……」

「はっ、神を名乗る奴が人間様に一捻りとは笑えるなあ？」

神はおとなしくサイコロ

でも振ってる、アホ」

「ほらほら、そういうこと言わない」

「お前なあ、テメエの命狙われたつてのに何呑気なこと言つてんだよ。コイツぜつてえ性懲りも無くテメエを狙うぞ?」

「ま、まあまあ。その時はまたオレが相手すればいいだけだし、さすがにヴァジラに主神殺しはさせられないでしょ。……ちよつと、ヴァジラも本気で何とかしなきゃいけないんだけど」

「だあ、クソ!　なんで次から次へと面倒ごとが湧いてくるんだ」

……畜生。闘神の私が手も足も出ないなんて……ヴァジラの身体まで借りてるのに、手も足も出ないなんて……。しかも相手にすらされてないなんて……。